

## 農地改革による農村社会構造の变革 Ⅱ

——富山県砺波地方における実証的研究——

山 本 英 治

### 六、調査村の農地改革と社会構造

最初に農地改革について述べることにするが、本村の改革における問題点やその性格や意義をそして評価は一応「一、調査村の経済構造」で分析したと思うから、ここではその改革に対する態度や記録や経過その他を述べておくこととする。

まず農民たちのこの改革に対する受け取り方についてであるが、それは封建的意識によつて支配されたと思われる。すなわち「地主層の誠に大きな犠牲であつて……とにかく譲渡を受けられし各位の長く脳裡に止め、子孫末代に語り継ぐべき一事と思うのである」さらには「……安いお金で自作農となることが出来たので一同喜びあつたのですが、しかしこれは法のお陰げと云うものの地主様方には誠に至極である。何とか謝恩会を開こうじやないかと云うので直ちに数百名の元小作の方々が……」と云うのを見ればまことに明らかである。農民達にとつて農地の解放と言うのは権利として、獲得したものではなくて、地主の恩義として感じられたと言うことである。

(1) したがつて農地開放後の旧地主対小作の社会関係や社会意識形態は市民社会的なそれではなくて、封建的なそれなのであり、これが今日の日本社会の型の規定とも関係することになってくるのである。すなわちこれは一つには、日本の農村社会は上から絶対主義によつて方向づけられ、下からは農村共同体的関係を通じて、半封建的な農村ヒエラルヒーを形成した。したがつて地主

と小作農との階級対立関係はこの半封建的なピラミッドの序列によつておおかくされてしまつた。第一次大戦後農業不況の頃になつて、農村社会における諸矛盾が激化し、表面化するに従つて、階級対立にめざめ、各地に小作争議が起つたが、国家独占資本主義の強い関与にもとづいて、ファシヨ的な日本農村の再編成が行われ、寄生地主的な支配体制を次第に補強した。このように農民は階級意識にめざめるとまもなく半封建的な社会関係のなかに組みこまれていつたのである。いま一つはイギリスにおいて見られるような早い封建的土地制度の崩壊と独立自営農民層「ヨーマンリ」の成立、そしてこの独立自営農民層の階層分化によつて資本主義社会「近代社会形成の一つの契機が生まれたことや、あるいはフランスに見られるごとく社会の近代化のための必須の前提条件となる農民革命が起り、これを基砢として独立的土地所有者の社会が創出」「自由な独立的生産者、自主的所有の自営農民が創出されることによつてフランス農村社会の近代化に一つの契機が与えられたと言うごとき歴史的發展は日本社会において見られず、したがつて日本社会の近代化は典型的な歴史發展によつて成立しえず、すなわち「歴史的生産社会の諸規定、諸関係が段階的構造的に止揚されることなく重畳的に凝滞したまま日本封建制の背景を構成しつつ特殊日本的な型制を打刻しているかに見える」のである。日本社会がこのような歴史的構造をもつことからして、農民の社会意識形態が封建的な段階にとどまつて近代社会的なものになりえなかつたのは必然と言わざるを得ない。わけても今回の農地改革は下からの農民

(2)

斗争によつて獲得された改革ではなくて、外庄による上からの官僚組織によつて遂行されたものであることからして、近代意識に目ざめることなくして前述のごとき地主層の「犠牲」とか「恩義」と言う意識形態をもつて農民はこの改革を受けとめたのである。しかしこれはあくまで一般的傾向であつて、改革に前から既に近代意識をもつていた者も少なくないし、またこの改革を機にこの意識が逞しく成長したり、新しく目ざめた農民も少くないのである。これらは各地におきた多くの斗争の例を見れば明らかである。

改革に対する態度については一応このくらいにして、次は改革の経過や記録を村の資料によつて見てゆきたいと思う。昭和二十一年十二月任命の調査村の農地委員選挙における選挙人数及び委員の定数区分は次のごとくである。大体本村では自作と言つても自作地主であり、地主と云つても小規模なもので、自作層と地主層を同じ階層と考えてよい。会長は自作であるところのN氏

第一表

区 分	選 挙 人 数	選 出 委 員
小 作	六二六人	五人
自 作	二二九人	二人
地 主	七六人	三人
合 計	九三一人	十人

が選出されている。農地委員会第二次構成が昭和二十四年八月に行われたが選挙有権者数及び委員数は第二表の通りで第一次の階層区分に比して著しい変動が見られる。すなわち二十四年には小作層の選挙人数が約6/1に減少し

第二表

区 分	選 挙 人 数	委 員 数	備 考
一 号	九五五人	二人	第一次の小作
二 号	七〇	二	第一次の地主
三 号	七四一	六	第一次の自作及其他
合 計	九〇六	十	

第三表

	買	収	売	渡
田	一六〇町四反六一〇歩		二〇一町六反九二三歩	
畑	三反八〇九歩		三反八二七歩	
宅 地	八、八四五坪四八		一〇、一三四坪四八	

買収と売渡の差は財産税の物納である。

詳しい改革の経過および成果を次に述べよう。しかしこの改革で本村においてもつとも問題となつたのは前述したごとく慣行小作権の取扱についてであるが、これについては「四調査村の概況」で既に述べておいた。

第四表

	筆 数	地 積	賃 賃 価 格
田	一三、七八七	三三六二二二七反	八二、一〇八・一五
畑	九〇	六・八一九	一〇九・九〇
宅 地	八四七	二〇〇・六〇九	七、二九八・三〇
山 林	三五	三・六〇二	八・五〇
原 野	二五三	五・四二六	五・五三
雑 種 地	九	五一六	一・三八
計	一五、〇二一	三五七九・四〇九	八九、五三一・七六

委員数が五人から二人と減り、これに比して自作層の選挙人数が約三倍強に増え委員数も三倍となつてゐる。地主層の方はさしての変動は見られない。これはとりもなおさず二十一年から二十四年までの農地改革の成果と見られる。小作が減り自作の増加は改革による進歩であるが、地主層の変動の少いのはこの間において未だに地主層を崩かいせしめるに至らなかつたことを示すものである。そしてこの委員会の第二次会長は大地主のS氏が選出されている。このように半封建的な構造は容易に破かいされなかつたのである。

とにかくこの二十一年から二十四年までの改革の成果を次に示そう。

第六表

買収回数	買収年月日	地目	筆数	地積	対価	地主数
2	22・7・2	畑	一、二四四	三五反三五歩八三	一三三、三九円六六	七六
4	22・12・2	畑	三、四〇三	八三・二・一〇〇	四九、七五・〇〇	八四
6	23・3・2	畑	一、五八一	三六・三・二〇〇	二六、四六・〇〇	三三
7	23・7・2	畑	一、二八九	五八・四・〇〇	二七、七五・〇〇	二二
8	23・10・2	畑	二、二八	九一・〇・七	四、四一・一八	六三
9	23・12・2	畑	三、三三	一六七・〇・五	三、二〇・〇〇	一三
10	23・12・31	畑	二、一五	二二・〇・〇	一、一五・〇〇	一一
11	24・3・2	畑	一、〇四	三・三・三	一、一五・〇〇	一四
12	24・7・2	畑	六、五〇	一四・八・〇〇	二、六四・五五	四一
14	24・12・2	畑	八	三・二・四	一、五五・四〇	一
15	25・3・2	畑	一、〇	三・六・〇〇	一、八六・〇〇	二
16	25・7・2	畑	一、五	五・〇・五	二、六四・一〇	三
合 計		畑	一、七九四	一、六六・五九・六〇	七六、〇五九・七六	四〇四
		田	一、七	二九・〇・九八	五、二四・八五	三六

山本・農地改革による農村社会構造の変革 Ⅲ

第五表

まず改革が行われるに前の本村の概況を見ると、本村の全地積に対して田が約九一・一％も示している。と言うことは本村の改革の重点が水田にあつ

地主的所有農地	自作地
在村地主所有農地	二八二反一〇三歩
不在地主所有農地	二六反一二二歩
合 計	三〇八反二二五歩

たことを明らかにしている。さらにつづいて第五表で地主所有農地状況を見よう。これで見ると地主は本村の農地の約一三を所有していたことがわかる。さらに不在地主が存村地主の一・二強も所有している。これは何にもとづくものであるかは調査不十分で、判明しないが「慣行小作権」と関係があるのではないかと思う。しかし本村の大きな地主はいずれも存村である。

改革前のこのような状態でいよいよ二十二年から農地の買受がおこなわれたのであるがその二十五年までの経過を第六表に示そう。

これで見ると農地の売渡は大体二十三年までにその大勢が決定してしまい総売渡面積の約九七％が終了している。買取の方も大体これに比例して行われているのであるが、ただ異なるのは二十三年の三月二十五日と三十一日に財産税物納地と言うものと、その買取世帯数と合計が違ってくるのである。これを第七表にて示すが第六表と同じ数字は記入してない。問題を田にかぎると、土地開放の地主の延数が四〇四に対し、土地買取世帯延数がその約二・五倍の一、〇九四となっており、これも二十三年中に約九八％終了している。と言うことは本村における農地改革は大勢としては二十三年で一応決定され、その後は残務整理のごとき観を呈したと言わなければならない。この改革の総合結果についてはすでに「四、調査村の概況」の第四表で示したのであるが、二〇二八反九畝〇二歩の自作地が創設された。すなわち二十三年の自作地の比率が三五・八％であるに対して昭和二十五年にいたつて九九・五％となり、小作地は六四・二％から〇・五％の変化に対応して、農家構成が二十二年の自作の一八戸が二十五年には二六戸と激増し、小作が一二二戸から三戸と激減している。

さらに次の第八表および第九表にて開放者の属人部落別と買取者のそれを見てゆきたいと思う。田の開放面積の最大は不在地主のそれで四九二反余になつてゐる。また人数も最も多く九九人である。これについて原道島の二九五反余の二人、浦之島の二九四反の一人であるが、一人当の平均開放面積から言うと浦之島がトップで一九反余となり不在地主の方が約五反ぐらいである。と言うことは浦之島には比較的大きな地主がいたことを証明するも

## 第七 表

回数	売渡年月日	地目	筆数	地積	対価	買取世帯数
2	22・7・2	田畑	11	11	11	194
4	22・12・2	田畑	11	11	11	33
6	23・3・2	田畑	11	11	11	356
納税財産 地物産	23・3・3 3125	田畑	1、6、6、6 一八三	四二反三三 四・三〇八 四・三〇八	100、六四三・八〇 三三・八〇〇 八七四・七〇〇	二四三
11	23・7・2	田畑	11	11	11	六八六
13	23・10・2	田畑	11	11	11	二五七
15	23・12・2	田畑	11	11	11	二六四
16	23・12・31	田畑	11	11	11	二一三
18	24・3・2	田畑	11	11	11	二一六
20	24・7・2	田畑	11	11	11	六三四
23	24・12・2	田畑	11	11	11	二
24	25・3・2	田畑	11	11	11	一四
26	25・7・2	田畑	11	11	11	三
合計		田畑	一八三	三・四三・九八 三・八〇九 三・四三・九八	九二二・六三三・二〇 一、四八七・七六 六六・九四六・五五 一、〇〇四・四〇	二、〇〇四・四〇

のである。これについては第十表で明らかにする。買取者の方は表之島の人々が最も多く買取を行い、一人平均一〇反弱を示している。開放の大きかった浦之島において買取はさほどの様子は見せていないのは、前述の大地主の

第八表 開放者属人部落別表

部落名	田	畑	宅地	開放者数
表之島	一一五反七〇三	反二一六	一、二八八坪六一	二二
浦之島	二九四・一二五・七〇	一〇二	一八一・〇〇	一五
九本杉	一九六・一一三・二七	〇二五	七二二・〇〇	二〇
道之上	一〇三・〇〇六	〇一一	二九二・八三	一三
道之下	二三・二〇〇・七五	〇一一	三七二・四三	一五
八幡島	一六・九二八	一〇四	一〇五・四九	一五
原道島	二九五・三三三・六〇	〇二一	一、五九六・二九	二一
藤田島	一六七・五一九	二二八	七五六・二三	一五
宮島	七〇・八一四	四二七	二七八・三六	二二
東島	八五・五二七	三三一	一〇七・一三	一三
中之島	五一・二二二	〇〇六	六九・〇〇	一七
西島上	四二・〇〇九	1	四五八・六七	一二
西島下	七四・五〇六・四五	一〇七	二八九・六四	一五
不在地主	四九二・五〇二・八三	二・〇〇八	三、四九一・九〇	九九
計	二〇二八・九〇二・六〇	三・八二七	一〇、〇二二・九八	三〇三

存在を示すことの裏付と考えてよからう。とにかくこの改革で土地を開放した存村地主数は一九八人であり不在地主九九人もこれによつて消滅したと言わなければならない。この開放および買取の状況を農地規模別に見ることによつてその詳細を明らかにしたいと思う。まず第十表をみれば直ちに明らかになるごとく浦之島において、一人で実に二二反五〇六の農地開放を行った者がいる。これは本村においては珍らしく最大の地主である。これは医者であり村でも最も旧家に属し、今日までの村支配の実力を握っていたM家で、面接調査においてその戸主はこの農地改革を攻撃していた。次いで大きなは

(5)

第九表 買取者属人部落別表

部落名	田	畑	宅	地	買取者数
表之島	二六二反四一二歩	反六〇九	八八二坪八三	二八	二八
浦之島	一二四・三二三	〇〇七	二二六・〇〇	二五	二五
九本杉	一二九・三三四	一	二八八・七一	二二	二二
道之上	九八・六二・四五	〇一二	六六七・三三	二二	二二
道之下	一七七・八二・二七	〇〇九	九八四・四五	二六	二六
八幡島	一四〇・七一・六〇	〇二八	六九四・一三	二一	二一
原道島	一四六・〇〇六	三二二	四四三・一八	二六	二六
藤田島	二〇〇・二〇七・五〇	〇〇二	一、〇六〇・〇五	二八	二八
宮島	七九・九二二	二〇三	四五六・七二	一六	一六
東島	九八・八〇・八三	六〇七	五一三・一三	一五	一五
中之島	二二四・三〇〇・五〇	一・一一〇	一、八七二・七九	二九	二九
西島上	一五二・三二〇・五〇	三〇八	八六六・四二	二四	二四
西島下	一二八・一一四・四五	三二四	九五九・四〇	二三	二三
入耕作	七六・〇一〇・五〇	〇一六	一〇七・八四	四三	四三
計	二〇二八・九〇七・六〇	三・八二七	一〇、〇三・九八	三四八	三四八

九本杉の九二反五〇一の開放であり、とにかく五町以上の開放を行つたのは本村で僅か七人にすぎない。これはM家をのぞいて本村はいかに大地主が存在しなかつたかを如実に物語るものである。後は自作地主がほとんどであり、それらはすべて規模の小さいものである。そして大体前記の七人は今日までの村の実力者層として村支配を行つてきたのである。だがこの改革においてこれらの層は転落し、新しい実力者すなわち市会議員（砺波市）とか、あるいは農協組合長がその支配権を握るにいたつているが前述の旧支配者層がそれらのバックとして存在していることもいえない事実である。買取の方は

第十表 農 地 開 放 規 模 別 調

( ) 内は地主数

(6)

	表之島	浦之島	九本杉	道之上	道之下	八幡島	原道島	藤田島	宮 島	東 島	中之島	西島上	西島下	不 在	合 計
1反未満	(7) 3.105	(5)反 1.704	(7)反 3.311	(7)反 1.103	(12)反 3.710	(12) 1反401	(9)反 2.028	(2) 127	(1) 322	(4)反 1.604	(8)反 1.120	(7) 1.214	(8) 2.112	(44)反 13.025	(33)反 36.306
2~3反	(4) 8.822		(3) 3.517	(1) 2.325	(3) 4.502	(1) 1.629	(3) 5.629		(4) 6.821	(2) 3.114	(3) 5.805	(2) 4.526	(1) 1.800	(11) 21.321	(38) 70.301
3~5反	(2) 7.607	(2) 6.727	(2) 7.700	(1) 3.627		(1) 4.226		(2) 8.213	(2) 9.004	(2) 7.518	(1) 4.422	(1) 3.613	(3) 10.513	(10) 40.629	(29) 114.219
5反~1町	(3) 20.909	(4) 32.111	(1) 8.608			(1) 9.706	(4) 28.101	(6) 37.227	(1) 8.028	(1) 5.829	(2) 13.425	(1) 7.924		(10) 73.712	(34) 246.000
1~1.5町	(1) 11.307		(2) 22.110		(1) 14.929			(2) 21.415	(4) 46.926	(2) 22.300	(2) 26.306		(1) 11.311	(8) 97.419	(23) 274.303
1.5~2町	(1) 15.605	(1) 18.706	(2) 36.026	(2) 33.725			(1) 19.212	(1) 17.202		(1) 16.419				(3) 49.727	(12) 206.900
2~3町	(2) 48.324	(1) 22.323	(1) 22.225							(1) 28.924		(1) 24.522	(2) 48.807	(5) 126.018	(13) 321.423
3~5町														(2) 72.311	(2) 72.311
5~10町			(1) 92.501	(1) 62.027			(3) 240.306	(1) 83.413							(6) 478.317
10~15町															
15~20町															
20~30町		(1) 212.506													(1) 212.506
30~															
合 計	(20) 115.819	(14) 294.217	(19) 196.208	(12) 103.017	(16) 23.211	(15) 17.102	(20) 295.416	(14) 167.807	(12) 71.311	(13) 85.918	(16) 51.218	(12) 42.009	(15) 74.613	(93) 494.510	(291) 2032.729

( ) 内は地主数 第十一表 農 地 買 受 規 模 別 調

	表之島	浦之島	九本杉	道之上	道之下	八幡島	原道島	藤田島	宮島	東島	中之島	西島上	西島下	入耕作	合計
1反未満	(2)反 1.102	(5)反 2.113	(2) .522	(5)反 2.316	(4)反 2.329	(2) 201	(5)反 1.926	(1) 005	(1) 405	—	—	(2) 1.218	(6) 1.324	(20) 8.115	(55)反 21,925
1〜3反	(1) 1.518	(3) 4.609	(4) 6.503	(5) 11.410	(2) 4.715	(2) 4.118	(4) 9.616	(1) 2.924	(4) 9.325	—	(5) 10.506	(2) 5.206	(3) 6.625	(112) 20.025	(48) 97.516
3〜5反	(2) 7.525	(3) 11.220	(3) 11.626	(1) 4.118	(3) 10.322	(5) 21.303	(3) 11.208	(4) 15.110	(3) 12.407	(1) 3.828	(4) 15.720	(7) 29.326	(3) 10.322	(10) 38.705	(52) 203.300
5〜1町	(13) 103.414	(9) 57.919	(8) 53.718	(7) 49.319	(12) 99.015	(7) 50.204	(10) 73.607	(17) 127.920	(7) 46.914	(11) 74.120	(15) 118.629	(8) 59.609	(8) 67.818	(1) 9.035	(133) 991.724
1〜1.5町	(6) 82.121	(4) 48.319	(5) 56.814	(3) 31.400	(4) 46.027	(4) 49.915	(4) 49.821	(5) 54.112	(1) 11.006	(2) 21.321	(4) 50.620	(5) 57.129	(2) 24.627	—	(49) 583.722
1.5〜2町	(4) 67.201	—	—	—	(1) 15.212	(1) 15.002	—	—	—	(1) 19.725	—	(1) 17.120	—	—	(8) 134.400
2町以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	(28) 263.021	(24) 124.320	(22) 129.324	(21) 98.704	(26) 177.900	(21) 140.813	(26) 146.318	(28) 200.209	(16) 80.125	(14) 99.409	(29) 125.410	(24) 152.628	(23) 128.114	(43) 76.010	(345) 2032.729

(7)

一人で一町九反七二五も手に入れたものが最高であるが、大体一町五反以上は八人である。開放の方で一反未満の開放者が一三三人で最高で一体に開放規模が大きくなるにつれて開放者数が減ってきている。大体平均一人当六反九畝の開放規模である。すなわち大地主はM氏のぞいては存在せず、小地主の数が多いいわねばならない。これは慣行小作権の存在によつて特殊化されたことで自分が小作をしていると同時に、小作者をもつていことから

生じたことである。さて買取の方であるが五反一町までの人数が最も多く一三三人しめている。大体一人当平均買取面積は五反八畝強で開放より約一反少くなっている。

以上で大体本村における農地改革の経過は終るが、一見その成果が見られるように思うが、所有関係の改革に終つて経営面積に变革がないとか兼業化(農業の副業化)とかあるいは一作卸の残存や村民の社会意識形態や新しい

村支配層と旧いそのつながりのなかに多くの問題が潜んでいることを見逃してはならない。とくに一作卸の問題は旧い体制につながるものであることに注目せねばならない。

次に本村の社会構造の問題に入りたいと思うが、ここで断つておきたいのは共同体の構造についてであるが、これは前述したごとく問題意識化したのみで調査にいたらず、その資料もなく、したがってここでは述べえない。本来はこの共同体構造こそが問題点であつたのであるが、まことに残念と言わざるをえない。ここでは本村の社会構造の一般を述べるにとどまる。

まず政治意識の問題から入りたいと思うが、それには選挙の結果を見れば

第十二表

保	河	松	内	木	岩	草
土倉	合	村	藤	倉	沢	倉
96	202	292	236	33	16	21

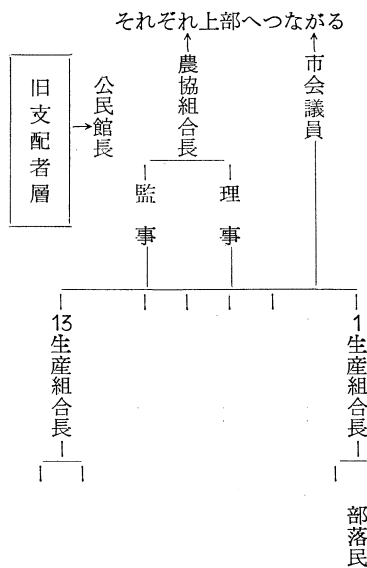
明らかである。次の表は昭和二十七年十月一日の衆議員選挙の結果である。これを見るといかに保守勢力が圧倒的であるかが判明する。これは農民の意識もさることながら、保守の地盤が強固なものであることを示している。しかしこの保守勢力支持の間にも以前から派閥があり、本家分家や親分子分の関係を通じて、それぞれの派に拠つて争があつた。昔はそのことで血を見ることもあつたと言われる。しかし面接調査の時、三十五、六才の主婦がはつきりと

共産党支持をうちだした一例もある。だが「労働組合のストライキ」に対しては調査対象者のすべてが否定的な答を出した。理由は農民の方が苦しく不安トライキが出来ない。それに労組のストライキに対しては農民と言うより一般消費者としての立場から多くの不利益をこうむると言うのである。この点に関しては彼等は社会意識のおくれがあると思われる。さらに天皇制は勿論圧倒的に支持され、天皇に対する批判はなくむしろ同情的である。

また軍隊については四十以上の人は賛成であり、「軍隊がないと若い者の根性がよくなる」と言う。これは若い人のなかに二三、聞かれた。しかし女の人はすべてこれに強く反対している。

前にも一寸ふれたが現在村の支配者層を形成しているのは市会議員(本村

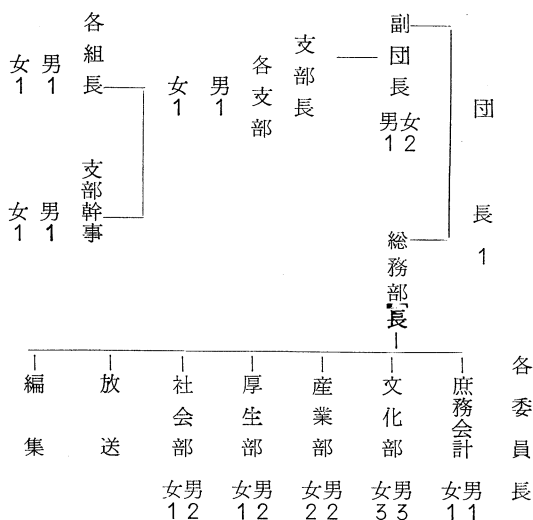
は調査時においては砺波市の一部)と農協組合長と公民館長である。市会議員は二人いるが二人とも保守系である。そして各部落に生産組合長がいて部落と支配層の中間項としてのつながりをもたせている。生産組合長は大体中農以上でないとなれえず、現在二人の市会議員及び農協組合長は村の旧家であり、公民館長は旧村長である。そして旧い支配者層が新支配者層に対するプレッシャー・グループとして存在している。このように見ると支配構造は一見明らかに変つたのように見えるが本格的には旧いものとか何か共通したものを保持していることが判る。次に本村の構造を一応図示してみよう。



さてここで青年団について少し述べよう。男は八五人、女は二五人で長男は半強制的に加入せしめられ、八五人中七五%も占めている。団員一〇人中二五%は会社へ勤めに出ている。年令は新中卒業と同時に加入し二五才である。二五才をすぎると一般農協組合員となる。次に組織および行事運営について表を掲げる。これを見ると相当に充実した組織であり、女の立場も充分考慮してある。

年	中	行	事
一月五日	役員会	七日	入退団式
三月三日	演芸会	七月下旬	体育会 造林地下刈
八月	盆踊大会	九月	社会見学
十一月	農産物品評会	十二月	講演会反省会
			野球大会





しかし、女子団員の活動は振わないとの話である。年中行事は大体何処の青年団にも見られるのと同じである。この他に祭礼の時の事業を担とうし、余興をやったりシシ舞を行ったりする。この他に毎月常会を開き、二月に一度新聞を出している。また青年学級を開いているが出席率は約五十%である。団長が言っていたが団運営は下火であり、青年団活動も不活発で、政治意識も低い。と言うのは何か新しい事でも行おうとすると多くの場合村の古老とかその他年長者からの圧力がかかって動きがとれないためである。しかしそれは青年団員が村について強い問題意識をもたないためではないかと思う。他方4Hクラブの連中は非常に農業技術の問題については熱心であり、多くの仕事を村でなしている。彼等は青年団員の一人であり十八才から二五才で二十名位である。この4Hクラブ員をのぞき若い人達は村の問題について熱意をもたなくなつて行く傾向は農業の副業化の問題と都会化の問題と結びついているのである。これは結婚の問題にしたつて言えることで都市や町の方へ

は喜んで嫁に行くが村へ嫁のきてが少くなく、また村内ではあまり婚姻関係が見られず、まだ隣接村との婚姻関係が見られる。結婚については改善がやましく言われているが、それは口先だけで依然として盛大である。農民達は現金収入の余剰分を農業資本として蓄積して農業技術に積極性を打ち出すことなく、多くは家を直したり、仏壇をつくつたり、結婚を盛大にしたりすること、また他の消費的なことに多く費している。これらは農業生産者としての行動ではなく、一般消費者としてのみ始終しているので、農業の近代化はますます遅れると言わざるをえない。

次は村内の家の関係であるが、本家分家の関係は盆とか正月を通じてのみ行われることが多い。普通は隣近所の関係に重点がおかれ、「ゆい」なんかも近隣関係で行われ、それもお金で決済され、また「もらい風呂」も近くの家々の間で行われている。それは部落内にとられることなく、とにかく地域的な近きで行われている。これは結局「散居」と言う本村独特の地域性に由来することは明白であり、他の集村と異なつた共同体構造をもつことになる。

以上において簡単に本村の社会構造の概観を見たわけであるが、この点について調査技術のまづさから実に不十分な資料しか入手しえず、一般論に終つたことを残念と思つている。さらに調査意図や仮説において述べた農業経済学的基础の上に立つ農村社会学と言う点においても体系を保ちえず、不統一なものに終つてしまつた。しかし共同体の問題にタッチ出来なかつたとは言え、調査意図や仮説で述べた大筋は或程度認識しえたと思う。すなわち、確かに農地改革は本村に大きな成果をもたらした変革を与えた。だがその底にとり残された旧い諸関係が旧体制の方への逆の支点ともなりかねない可能性をもつている。——作卸の問題や(ブレッシャーグループとしての旧支配者層の問題——さらにまたまかつた新しい問題も生まれ、以前とことなつた農村の様相をつくりつつある。——農業の副業化と青少年の都会化や消費生活の拡大——。しかし大局から見ると、これらの旧い諸関係も次第に消滅し、変つた村構造がうまれてくるのではなからうか。これについてはさらに日本農村の現状についての詳しい調査分析が必要と思われる。

註

富山大学 経済学部論集

(1) 東野尻村農地委員会「農地改革経過録」

(2) 同資料

(3) 日本の封建構成は「純粹」に封建的なものではない。むしろそのうちに封建以前の或は古代奴隸制的の、或は更にアジア的の歴史的生産社会の諸規定・諸關係が段階的・構造的に止揚されることなく重疊的に凝滞したまき、日本封建制の背景を構成しつつ、特殊日本のな型制を打刻し

高橋幸八郎「近代社会成立史論」

(4) 高橋幸八郎「近代社会成立史論」

(5) 富山大学経済学部紀要第十三号「農地改革による農村社会構造の変革」II  
同資料

(6) 農政調査会「富山県砺波地方における慣行小作権の構成と農地改革八八  
頁一八九頁

紀要十三号「農地改革による農村社会構造の変革II 五、調査村の経  
済構造